

# 退院支援満足度調査による退院支援ニーズの検討

キーワード：退院支援・患者満足度・評価・地域連携室  
県立安芸津病院 ○胡 美恵・内山 早苗・岡本 清子

## I. 目的

本研究では、急性期・亜急性期病院である100床のA病院の退院患者の内、退院支援の必要なハイリスク患者を対象に満足度調査を実施し、退院支援の満足度に影響する要因分析を行い、退院支援内容を検討することを目的とした。

## II. 方法

1. 調査対象：2010年2月～6月の間にA病院を退院した患者のうち、入院時の初期スクリーニングシートにより、ハイリスクと判定された患者、或いはその家族179名
2. 調査期間：2010年7月～10月
3. 調査方法：郵送による無記名自記式質問紙調査
  - 1) 患者の属性：患者の年齢・性別・家族構成・日常生活自立度・主介護者の年齢等
  - 2) 調査内容：退院支援の総合評価を4段階で点数化した。退院支援評価として小川ら<sup>1)</sup>の満足度評価項目を参考に15項目を設定し、4段階で点数化した。
  - 3) 倫理的配慮：対象者に研究の趣旨について文章で説明し、回答をもって同意とした。趣旨書の中で、個人情報保護されることやアンケートは任意であり、回答しなくても不利益は被らないことを説明した。尚、本研究は、A病院倫理委員会で承認を受けた。満足度評価項目の使用にあたり、作成者から承諾を得た。
  - 4) 分析方法：退院支援に対する評価については単純集計と因子分析（主成分分析、バリマックス回転）、退院支援の評価と満足度の関連については重回帰分析を行った。

## III. 結果

1. 対象者の背景：アンケート調査対象者179名中、回収数は、79名（回収率44.1%）、有効回答数は54名（有効回答率30.2%）であった。回答者の内訳は、本人が25名（46.3%）、配偶者が9名（16.7%）、子が12名（22.2%）であった。患者54名の性別は、男性21名（38.9%）、女性33名（61.1%）であり、年齢は、38～95歳で平均年齢80.4（±8.87）歳であった。家族構成は、夫婦2人暮らしが19名（35.2%）、独居が15名（27.8%）であり、日常生活自立度は、Jが25名（46.3%）、Aが14名（25.9%）であった。主介護者の年齢は、39～88歳で平均年齢68.7（±12.37）歳であった。
2. 退院支援の評価：「身体がどの程度回復するか、わかりやすく説明を受けたか」の問いに対し、50名（92.6%）が「全くその通り」、「ややその通り」と回答していた。「介護の方法を具体的に教えてもらったか」の問いに対し、35名（64.8%）が「全くその通り」、「ややその通り」と回答していた。全体を概観すると、「全くその通り」、「ややその通り」と回答したものが平均80.7%を占めていた。また、入院中に受けた退院支援援助に対しての満足度は、

満足22名（40.7%）、やや満足23名（42.6%）であった。

3. 退院支援の評価と満足度の関連：「サービスが生活になじむ」、「退院後生活の不安解消」、「安心して過ごす」の3項目の評価が高いほど満足度も高いという結果が得られた（ $R^2=0.802$ ,  $p<0.05$ ）。
4. 退院支援の評価内容の構造：評価15項目において、因子分析を行い、「社会資源の活用方法の説明」、「退院後の療養上の説明」、「生活上の安心感の確保」の3因子が抽出された。累計寄与率は77.0%であった。

## IV. 考察および結論

1. 対象者：対象者は70～80歳代が81.7%を占め、夫婦2人暮らしや主介護者に配偶者が多いことから老老介護が懸念され、介護者の負担への配慮が求められる。
2. 退院支援の評価：15項目の評価内容の全項目において、肯定的に回答した患者が平均80.7%占めており、退院支援の評価は高かったと言える。否定的に回答した約20%の患者は、退院後の生活に関連した内容の説明や相談を受けたと感じていなかったことから、患者・家族の退院後の生活の不安の軽減に重点を置いた説明と相手の立場や思いを尊重した関わりが大切であると考えられる。また、「入院中に受けた退院支援援助に対しての満足度」は、高い結果となったが、安心できる生活を見据えた具体的な内容の説明を行うことが重要である。
3. 退院支援の評価と満足度の関連：退院支援の満足度に関連がみられた評価項目は、「サービスが生活になじむ」、「退院後生活の不安解消」、「安心して過ごす」の3項目であった。退院後に患者・家族が安心して生活できるように重点を置いた退院支援内容が重要であり、個々の患者・家族に応じた具体的な説明が必要である。
4. 退院支援の評価内容の構造：因子分析の結果、「社会資源の活用方法の説明」、「退院後の療養上の説明」、「生活上の安心感の確保」の3因子が抽出された。「社会資源の活用方法の説明」は、社会資源を円滑に利用できるよう、患者に合った説明を受けられるかという内容であり、「退院後の療養上の説明」は、退院後の生活の注意点や治療の必要性についての説明を受けられるかという内容であり、「生活上の安心感の確保」は、退院後に予定したサービスを受け入れられ、安心した生活を送ることができるかという内容であると考えられる。病院側は、適切な情報提供と、患者・家族・医療者相互に退院後の生活をイメージ化して共有し、実現することが必要である。そのためには、地域と病院との連携を強化することが重要となる。

## 文献

- 1) 小川恵子, 福島道子, 郷間悦子: 患者と家族による介護保険施行後の退院計画の評価, 日本赤十字看護大学紀要, 17, 28-37, 2003